

白雲集

5
4316



5
4316



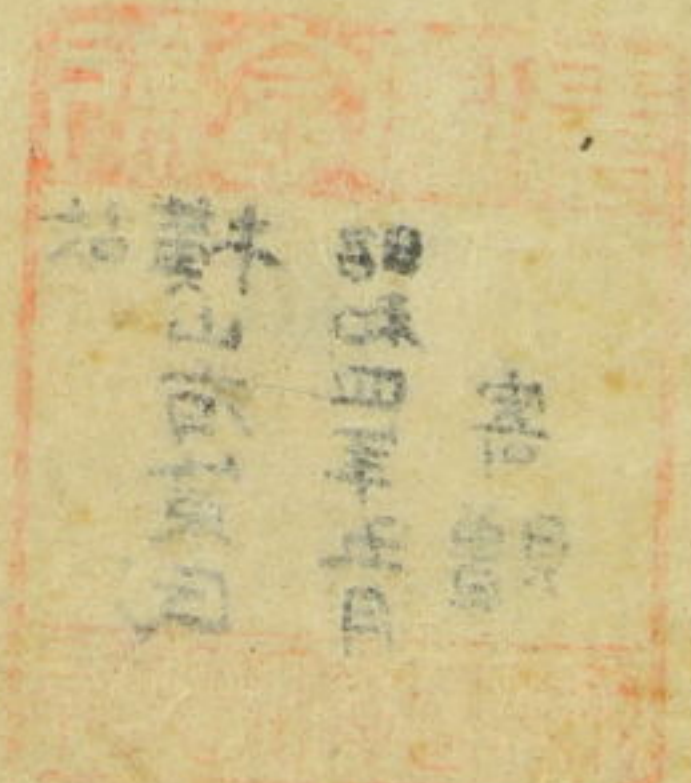
Handwritten Japanese text in vertical columns, including the characters '昭和四年五月' (May 1929) and '寄贈' (Gift).

5



白妙人集

丈和亦を神明の内澄佛及此妙理や人王十
 二代系行天王の御宇日本武尊少ひと守の心
 とさくいくねの孫つととの白とくねの孫つと
 よる始に御諧を程久る此天の淳をこれとに
 てうまーとと女よあひぬと室ひより今よ御
 まゝ世人是と説くやうともうが予仕後の存



5
4316

け道一紙ふりけ一巻を連宗の玉極と記し
天正の月のひよや三井寺にて法橋紹巴の玄仍よ
らるるひとて字と深むふと弔秘写して室と守
とくとも道一深き門弟子二子よふかふ守持
室とせよ人のきくもる事なれと仍く是とまり
るて白砂人集と号



一先後句にさかくの智ひ有る初筆のうらひ切字
むしりしはとらふはのちらむしはよはるるの
二よはるるの字によはるるはよはるるは五よは
現在のがとく現在のがとく一文字入て又作とる
事や

是れまの——やまの——まの——まの——まの——
まの——まの——まの——まの——まの——

是れ其の——あしきもの——あるところ——あしきもの——
若——ふかたのすの秘事——や

やとらふ——あしきもの——あしきもの——又口合のやとて
位——やあしきものやあしきものやあしきもの名所のやとて
かとてあしきもの。

あしきものやあしきものあしきものあしきもの

あしきものあしきものあしきものあしきもの

切字——

一か もろの やりあしきものあしきもの—— もろ——
あしきもの

あしきものあしきものあしきものあしきもの

—— 雲き——あしきものあしきものあしきもの

つ 丁のあしきものあしきものあしきもの

あしきものあしきものあしきものあしきもの

ぬ 秋はあしきものあしきものあしきもの 坤の風

是ハ早ぬよ切やあぬえぬきらぬふい
ふのぬよ切やあぬえぬきらぬふい

か 忘れぬ神のちうと松のむ

けふよ心はあもや忘れぬ神のちうと

押さく

い 羨望いく木の花れを月橋

い せいの人をも柳さくらか

か せいの世にぬ世うか

さハ さいん世うかぬきらぬふい

やハ 都やいふ糸の庭れみぬの松

鏡 月をさく桂や扇をかきん

是ハ さいん世の愛白とて夢ひあまふい

てぬいやとて狂言名通とせぬよさ

一世一白あましとやけおハと知

ちけ嵐 ちけ小麻さけ橋 月尺よふの熱ひ

又上りの白よきよんぬ切ま方と心の切字とて

むつー

「あふたふとまの目みく玉津」

「五月雨ハ岑の松風谷の水

」
「むハ飯栴ハ髪を時津風

右いつれも切なアと心ほおろく又上よの白り

「吹あふー花やいつくす栴ふ

」
「陸きひー後ノ藤よのあねが

右二おととおと切な有とくー上よの白り

とろり難ー

面ハ白心ほろり

一髪白ハ大お軍おれハも實お徳王位さく句栴あ

はかーとまー合志嫌おれハいつも上よの白り

せろー短髪ハ栴あさく

一編の仕程ハ髪白のりひねーとまを末と結あ

にすーとまーとまーとまーとまーとまーとまー

てハ詠の極きよなるは又詠は五つのは詠あり

一よハ相對ニよテ到ニよ遠ハ附ハよハ附　五よ

比とあり是ハ白ハ客人詠ハまはるも二ハお伴の

詠てよたにるあまなまの物の名よしてるは

「い〜もあ梅ハ春める行枝

雪〜とととと〜と〜と〜と〜と〜と

梅のむとまはまともて〜白ひ

庭の白砂の雪れま風

一第ニ詠よりよく詠あとも風体とかをまを優

はま〜くのみ〜とす〜一是よも現をの〜入

て〜と〜る〜なるまの〜ま昔〜と〜と

「里ま〜一 行もまはまら路とて

是現をの〜一 せて〜と〜と〜と

一 何白めハ詠よりけりさけて安くと詠〜と〜と

あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と　せり

と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

色くさるも ありふるも 浪のうらも
さつくさるも ともさるも かしこも

「下のうつゝありは事」

「あつちさく月におとふ」

是は月を執ふく音より寝まてなるあはれ心也

「あつておあく袖ぬ」

是は逢ぬ意としてまね袖とぬぐて歎く体也

右のあふとてかふ有く

「砌の門をむ」を啼つ

「夕べをれを人」とまらつ

はあ向當時のあなれいつとあはれあはれ

「門のうらお」を啼つ

うらあ當時のあはれとつとあはれ

「よとあうりにあ切坂名入ら」を啼つ

「てあうのあ」をよらあはれあはれ

但し押さるるあはれあはれ

「あ」のつちまゝ今とてまづいひて
是をいひて

「か」のつちまゝ今とてまづいひて
是とていひて

読と多りにあけらんとていひて

「な」をいひて

詠入とむらひまゝのつちまゝいひて
あけらんとていひて

とて

「あ」のつちまゝ今とてまづいひて

是をいひて

「い」をいひて

知らばすべしとて古人のつちまゝいひて
又五つに

「う」をいひて

是をいひて

いふまじつななき人と云ふて

是はいふまじつななきと云ふていふまじつななきの
まじつななき人か——答めまじつななき作者の心おとし
せむと

一首切連おとて甚まらふ白作有し

衣うの浅草と云ふ里うりて

衣うの浅草と云ふと

衣うの里ハ浅草ニ埋きて

一とよそとありくもぬる

おしぬ色そつくれ強ふぬ

是よそやうあるとありく

一とよそとありてありすくろ押まあり

一とよそとありてありすくろ押まあり

一とよそとありハ

祢けせへれぬ け候名なくてハある

一下の句は二五三四とあり

このまじりにまじり書きぬらん

是ハ三五のときりもて句はありてありてあり

このまじりもてありてありてあり

是三四とて句作よ

出席心持こる

一差懸神祇懐旧のまじりよらあり

後まじりハちよせ毎ハ万葉よと混りるるに懸

小ねふとと格く未だのむやうにすくと宗祇も
のむす

一与毎よ名句せんと去く思案一又一句く西と
すり屈伸ふとするハ一室の真とすれとまのまの
人とおまや只望入口め句さくくと附まら
句とね一ふ一おま一ろく附るハ強ハ懐紙もさ
やうに一室も真あり

一歩一絶と切とくまけ道の根本や三句のとあり

とらふたよハ秋の山とらふ平句と名およびなり
名おと付け又淡かしく附くや三句よらふらあり
美の夕よ唯くくち

一 著と合衣を纏よみるふとくむさと有くはひ著とに
さくほは若くくはくくつさすとも寺の梅なま
しよらあハ纏よみるすくく又著つらくおうんひ
すくくくくくを有てひのまといふまはあうんひす比む
一 ち句の附んを著るりすくくくからてまの枝を

根本小附

たててきくく門のゆり

九まハ似らち影を影のくことく

是名人の句くまくくくく門は似らち影を影と附て
ゆりすと控らるく

一 四つと附くとてあきららちおま

くく、指の秋りあれば

日くくの幸く急やと守界の松

右の上ノ字横ノ松社ノ事此ノ日ノ...
附之あまり嫌ひをといふも伝説ノ事ニより
白化ノよりいふもきこらる也

一 けりたまふらん事といふ事有く之以心傳
なれハ事ニ及むる一弘法大師等ノ傳小
ける事又教ニ長一上人の語一ハ教
この心好有といふ事なれ...
る事なり

一 此道の神といふ事有くお白ノ用なきを...
これといふ也

さうれすすハ...

雛子かく萩の焼系...

右の字ハ... 附之あまり嫌ひを...
一 意の連系... 白作...
おいて... 根...

「あつちとさういふとんり」

「二丁急とたぬ先に戸を叩く」

「是の海へ連舟よまゝあつちとさういふとんり 佐助よいっ
ふとねふふと」

「下の白よ一ふとんり 有る所の白よいふまゝとさく
なく長もふくれいふとんり ぬまのこ」

「風もさういふとんり ぬまのこ」

「けり様のやよやとり 定め舞より折る」 風の吹

「風もあつちとさういふとんり ぬまのこ」

「なり是一ふとんり ぬまのこ」

「とさういふとんり ぬまのこ」

「一 全ふさうとて不入白化さく」

「「産められた油の産とさういふ」

「一 能言とさういふとんり ぬまのこ」

「ふとねふふと」

「さういふとんり ぬまのこ」

とらふせし心致信類

立上りて涼しき海なる其陰が

激しけり乃の名通に二の珠作ふと思ひ侍る

一入ふく見白よ

心のかどよ夕まそたるふ

立おくり朝まをれぬ珠のそ

一兼哉八月十五夜の後白

雲夢の月よかくおほいよみけ

珠愛白作とてむし海清し侍るそ

右一巻当家館秘書依師歩く因

不渡相傳と平

長次磨在別

祕書要決

玄妙く發白

松白く嵐や音に震むらん

月かきく桂や薔王かくすらん

大回く發白くらん

あふたふと暮の日みくまは語

雲ちらふ風の石ゆく秋の月

是大回くの上よあふたふとあれハトよまは
ありも秋を大回くといふは雲ちらふとらん
下は月あり回あつ發白く

之は後切くらん

花ハ奴柳を髪と時は風

五月あハ岩の松風谷の水

柳と時は風ふくまよの入るれよまは之は後の切字と
るトヤ又嵐と谷と二つ入く五又まよに之らんあり

ねしとて夏の切まといなり

むもぬ風やといむ夏の庭

むくとも拂りつるねの音

右の句ハニま切といふ

ニま切といふ

折人ハむよ眠ん風いぬ

花や川之れ袖えぬまはる

ふち紫まきひくたうらら

新や梅を系をうらら池の

月やあらぬふらけの

やとらうららけとあつたきうららけといひ口の合のやと

らりやとけい口の合のやとららけといひ口の合のやと

七つめのやとらら

月やをあらぬうららのぬく軒 口の合のや

花やあらぬうららけといひ口の合のや

冬ゆきとや春よ日の入きり中のや、丹にや花
陽してし方のよと思ひこや捨や
今いそやと一と月を帯りてとめや
思ふやとあふれ人ぞ疑ひてすまのや
こおしんやまのちんしんしん 疑ひのや
右のやふきよふきのこり口の合のやとんまのこりも
申のや五ふきのこりもこのやとんまのこりも
疑ひのや、韻のや、捨や

一爰のやとあつらひにやこめてとあつらひ
但一爰のやとあつらひによりて苦しん
梅きく香とやまゝの流ふ
氷あせく根、凍芥の聖灰か
流す聖灰か、治定のやあつらひにやこめてあつらひ
又爰の物よとあつらひにやこめてあつらひ
爰のあつらひを疑ひ心のあつらひにやこめてあつらひ
あつらひにやこめてあつらひにやこめてあつらひ

いしり

えー ぞー 色ー

是こそめーとてお切ととるおとあつりおきー
ふん

おきー ねきー ねきー

是に次をい切さなり

あぬー ーきぬー ーきぬー

是に末葉のーと切さや

下の句てありおれとと押さるる

解のまじりきハおアして

水ー ーおまおれ月いさして

又

あつりいさ入のさーと

是こそと押さるととあつる

一のぬきお年ぬおま

あつりぬ けやぬいされぬや

むちりぬ 月しるすに年あはれ
かへしぬ 三えぬはなゝあきくかへし
ぬらんぬに切あしらくはあはれあはれ
しりら福あはれしりらあはれ

一ころのあはれ

あけててあはれ

是とあはれあはれ

一あはれあはれ

うくすしあはれ

けあはれあはれ

一あはれあはれ

迷ひあはれのあはれ

迷ひあはれのあはれ

定まらぬあはれあはれあはれあはれ

てあはれあはれ

一あはれあはれ

事か秋のころより早く袖のあ
うた夕と秋の追う勢

一 ころもふり

あつらふはなほ秋のころ

音らふも夕の山れるやより

一 かつひてよと

はの葉よりうきは雨乾さる

古里のさくられとよの葉の葉て

一 ころもふり

田あめかりくげく

そすれと海一てすに十とふり

一 下のるよとふり

とよもふり袖の洞

かいくらもふり袖の時あよ

一 服てよんはるより先物とよもふり

梅よ雪葉のむと蝶けあつらふとて

そして下てまゝはぬ——よましくは史有る——

昔あけあけの冬うらうらう

梅はまるとまけ白ひらり

是らうとてき——

一やとてまゝのうらうら

まのす急天下よある子親

はらまゝく切まぬのまのれとが——てまのよ

たふとま平のまぬやうよ白作らやに付

一花は梅附きなり

おまゝにまゝにえぬ花は起あぐ

ちれは梅の本うられの里

右附やう花と梅とありあかりし縁とあるのまゝ

えぬとありすうらうら附とちれは梅とあるはちれは

まゝとうらうらうら梅とあつるのまゝちりてまゝの

梅のまゝおまゝにまゝにえぬとまゝとて附と

一やなくてらんとまゝなり

あかしたるにきりてのてのての
かきこもへりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての

あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての

あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての
あかしたるにきりてのてのての

梅のさくらもみふるなりつ

右神ハ是よりよくあつたあしき

一十九てふんのみ

むきと極へてなまはす

むきとあれ極へてけしきあつた十九てふん
にあつた

神のさくらもみふるなりつ

神のさくらもみふるなりつ

以上

自所轉く書物相傳く中なり也

之録矣酉三月

芭蕉菴 桃青也判

藤川 許六 種文

右心お傳本字進交也

宝永六己巳臘月

五光井 許六 立判

摩訶庵雲鈴上人

京 辻井吉右衛門版

佛譜去來抄 三冊 尾陽曉其先生訂正
門人吞溟校

同 許六問 三冊 右同門人 亞滿 全 校

同 如來傳 一冊 右同門人 士朗 都真 著

同 十二段 二冊 右同門人 入素 著

同 撰の並 一冊 右同門人 士朗 撰

同 法海日記 一冊 道の記文章 雙鏡 著
英復白 旦水

同 白砂文集 一冊 とやん家 せう書

一字廟 傍 舟藏書



同 同 同 同 同



Handwritten vertical text in cursive script, possibly a signature or title.



Additional handwritten text at the bottom right, including a date or signature.

同 白 文 集 一 冊

同 道 元 花 文 書 贈 楊 著

同 東 山 同 門 人 士 朗 撰

Handwritten mark or signature at the bottom left of the page.

